岩手県宮古市



津軽石区「地域の宝」マップ

～鮭の恵みと歴史・文化の里～

津軽石区域について

津軽石区域は宮古市の南部に位置し、宮古湾に面しています。
V字形に深く入り込んだ内湾は波が小さくアマモなどの海草類が生育し、
豊かな生態系を形成しています。
晩秋に津軽石川を遡上する鮭の群れは、古くから津軽石の人々の生活を支え、
東廻り航路（太平洋沿岸の海運）により江戸へと運ばれました。
交易により隆盛した盛合家のほか、津軽石では多くの文化人を輩出しています。
かつての中世城館跡には神社が祀られ地域の信仰の場となりました。
信仰から生み出された多様な民俗芸能は、各保存団体や小中学校の
授業などを通じて現在も伝承され、未来へ繋がっています。

宮古市文化財保存活用地域計画とは

市内に点在する歴史や文化・風習を保護し後世へ残していくため、地域の方々や市内外のみなさんと文化財を活用し地域の魅力を深めていきたいと考えています。そのため、宮古市では地元に眠る「地域の宝」を、９つの区域ごとに「宝マップ」にまとめて後世に伝え残す活動をしています。

編集　宮古市スポーツ文化課（令和８年９月30日発行）
〒027-0097　岩手県宮古市崎山1-16-1 TEL.0193-65-7526
印刷・製本　川口印刷工業株式会社

地域計画の詳細はこちら

マップの詳細はこちら

※本マップの発行にあたり、令和８年度岩手県地域経営推進費補助金の助成を活用しました

近世邸宅 盛合家

13 盛合家住宅主屋 国登録有形文化財 建造物

盛合家は、江戸時代中期から廻船問屋として江戸商人と交易を行い、商家として発展しました。後に武士の身分を与えられたため、家屋は商家造りと武家造りが一体となった全国的に珍しい建築様式となっています。

享和元（1801）年に伊能忠敬ら測量人一行が宿泊するなど、数多くの文人墨客が訪れたため、多くの書や絵画が座敷の屏風・衝立などに残されています。



盛合家住宅主屋

14 盛合氏庭園 国登録記念物 名勝

寛政９（1797）年に、盛合家が盛岡藩主・南部利敬の宿所として使用されるのを契機に整備されました。主屋の南面に広がる庭園は江戸から庭師を招いて造らせたと伝えられ、「心字ケ池」の中央に亀石を配しています。池泉は石組で護岸されており周囲にサツキやツツジを配し、背後には築山が築かれています。19世紀ごろの三陸沿岸に伝わった庭園文化がうかがえる貴重な庭園です。



盛合氏庭園

浜街道と三陸鉄道



浜街道は今も津軽石稲荷神社の例祭で神輿渡御の主要ルートとなる（写真は津軽石新町バス停前）

50 浜街道

津軽石の街並みは、三陸沿岸を南北に縦断する浜街道沿いに江戸時代初期から形成されました。津軽石中心部の浜街道は、金浜から南へ馬越坂を越えて本町・新町を通り、渡船場から津軽石川を渡って藤畑へ続くルートです。近年三陸沿岸道路の工事によって馬越坂の一里塚が失われましたが、盛合家付近の桝形跡や渡船場跡の大きな槻の木・石碑群など、現在も旧道の名残が残っています。

旧街道の調査を行っている方のHPです

51 三陸鉄道リアス線　17 津軽石駅

近代に入ると街道とともに鉄道も整備されます。県民の悲願だった内陸と沿岸を結ぶ山田線は、昭和9(1934)年に盛岡―宮古間が開通し、同14年には釜石まで南へ延伸しました。しかし平成23(2011)年の東日本大震災で宮古―釜石間が壊滅的な被害を受けました。その後復旧工事を経て、平成31(2019)年にJR東日本から三陸鉄道株式会社へ移管されました。この区間で旧山田線時代の駅舎が残るのは宮古駅と津軽石駅のみです。特に津軽石駅は修繕されていますが昭和10(1935)年開業当時の木造駅舎がほぼそのまま現存し、昭和レトロなたたずまいを今に残しています。



開業当時の津軽石駅



現在の津軽石駅

津軽石のひと

13 盛合 魯斎 盛合家

盛合家は長い歴史のなかで多くの人材を輩出しました。例えば江戸後期～末期の当主・魯斎は、学問・詩文・書画に優れ、山崎友仙（鯤山の兄）・文道貫機（津軽石の瑞雲寺17世住職）とともに地元の青少年たちを教育し「閉伊の三傑」と称されるほどでした。慶応２（1866）年６月12日、57歳で没。津軽石の盛合家歴代墓地に眠っています。



盛合魯斎墓碑

10 山崎 鯤山 馬越の石碑群

江戸後期から明治にかけて活躍した津軽石村出身の漢学者・漢詩人です。17歳で江戸、のちに京で梁川星巌に学び、大沼沈山・小野湖山と並び「梁門の三山」と称される俊才となります。安政６（1859）年に盛岡藩校・作人館の助教となり、維新後は盛岡で私塾・集義塾を開き、多くの門人を育てました。

明治29（1896）年５月４日に75歳で没。墓碑のある盛岡と、郷里の津軽石に顕彰碑が建てられています。



山崎鯤山



鯤山先生詩碑

津軽石川と鮭



明治40（1907）年の鮭漁（岩手県立水産科学館蔵）

48 津軽石川と鮭

津軽石川の川底は小石が多いため、水温が安定し栄養に富んだ伏流水が流れ出て鮭のふ化・生育に適しています。江戸時代には津軽石の「南部鼻曲がり鮭」が盛岡藩の名産のひとつとして江戸に届けられました。

鮭の需要が増すにつれ漁場の確保が問題となりますが、津軽石村と近隣３村の協議により漁を行う日が定められ、鮭の資源保護をはかる種川制度も組み込まれました。

昭和48（1973）年からは宮古鮭まつりが開催され、平成23（2011）年の東日本大震災までは津軽石川で鮭まつりが開催されていました。

11 鮭のふ化 津軽石鮭繁殖保護組合

明治38（1905）年に鮭の人工ふ化場を開設しました。しかし、大正時代までは自然繁殖に頼っていたため、11月から翌２月までの期間中は月初めの１週間を禁漁日とし自然産卵の期間を設けていました。昭和48（1973）年には人工ふ化に一本化され、昭和56（1981）年は史上最高の漁獲高を更新しました。また、この年から行っている「さけ稚魚壮行会」では、市内の小学生などがさけ稚魚を放流しており、津軽石小学校をはじめ市内の小学校では稚魚の飼育も行っています。



さけ稚魚の放流

武士たちの館あと

24 払川館跡

払川館跡は、標高65ｍの丘陵地に築かれた山城です。16世紀に築城されたと考えられ、館跡の中心となる主郭や砦のほか、敵の侵入を防ぐ堀切跡などが残されており戦国時代の姿を今に残しています。

南部一戸氏の三男が津軽石に入った当初は沼里館に拠点を構えていたようですが、その後、払川館を築き津軽石氏を名乗りこの地域を治めていたようです。館神と考えられる石造の小さな祠が残されています。

20 沼里館跡

沼里館跡は、標高40ｍの丘陵地に築かれており、西側に続く尾根を空堀で切り、主郭とその周囲を帯郭で囲む単純な構造の山城です。また、主郭の先端に砦があり津軽石川河口から宮古湾を一望できます。津軽石氏の勢力が増すにつれ、手狭となった沼里館から払川の地へ移っていったものと考えられます。

近年の発掘調査で空堀跡や主郭には複数の建物跡が確認されています。



沼里館跡

鮭漁とまつり

10 又兵衛まつり 馬越の石碑群

江戸時代に後藤又兵衛という武士が飢えに苦しむ農民のため鮭留の板を破り、農民を救いましたが藩の役人に逆さ磔にされました。又兵衛の死後に鮭が遡上しなくなり又兵衛のたたりだとして遺体を供養したところ、鮭が再び遡上し始めたと伝えられています。

その伝承から津軽石稲荷神社に又兵衛を祀る五輪塔が建てられ、毎年鮭の豊漁を祈り津軽石川のほとりで神事が執り行われています。11月末の神事の後、２月頃まで又兵衛を模したＹ字型の人形が川岸に建てられます。



又兵衛まつりの神事

9 アンバ祭り 津軽石稲荷神社

津軽石稲荷神社の例大祭は「アンバ祭り」と呼ばれ、その年の鮭漁の大漁を祈り祭典が行われます。祭典の後は神輿が津軽石の中心部を巡り、津軽石に伝承されている「津軽石さんさ踊り」や「法の脇獅子舞」などの民俗芸能、創作太鼓の団体が神輿の前後で盛り上げます。



津軽石さんさ踊り



法の脇獅子舞



津軽石稲荷神社の例大祭

生業と信仰



藤畑駒形神社の額絵

46 藤畑駒形神社

閉伊頼基の妻「音羽御前」が愛馬の亡骸を埋め、供養したことから始まったと伝えられています。この一帯は古くから馬産地であり、駒形神社はその鎮守であったと考えられます。

50年ほど前まで人々の生活は牛馬と深く関わっていました。境内には日露戦争時の馬魂碑が祀られ、堂内にも牛馬の絵馬や額絵などが納められています。旧暦の４月20日には祭礼が行われ、かつては遠野や岩泉など閉伊の牛馬関係者から信仰され、現在でも市内から参拝者が訪れます。



馬魂碑

39 山神塔

赤前の山中には山神の碑が鎮座しています。かつての山は入会地であり、村内で区画を定め、木の実や薪などを得て生活していました。赤前地区の人々は薪木の伐採や家の改築時に木を切る際に、山中にある山神の碑を拝んだと伝えられています。

現在も山から流れる沢水を生活用水にしており、山と関わり合いながら生活しています。



山神塔